Osaka University Knowledge Archive

Title	ドイツの片隅にて
Author(s)	徂徠, 道夫
Citation	大阪大学低温センターだより. 1975, 11, p. 14-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6859
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ドイツの片隅にて

ダルムシュタット 工科大学　徂 徠 道 夫

「低温センターだより」の編集に数度関与したことがたたって，地球の裏側にまで原稿依頼が追いかけてきた。当地ドイツでの私の仕事は，特に低温を必要とせず，液体窒素でも事足りるテーマであることがまず第一点。第二は，ドイツを訪問された諸兄が非常に多いこと。第三は，私自身が見聞したドイツの大学は，ここダルムシュタット工科大学とザールブリュッケン大学の二つしかないこと。これらの理由から，「低温センターだより」にふさわしい内容や，今更取り立てて書く材料も無く，ほとほと困惑している。

まずは礼儀として仕事の内容につき一言。ある種の金属錯体は温度変化により，特定の温度で可逆的に低スピンと高スピン状態間の転移現象を示す。貫入錯体に関する小谷理論や錯体に関する田辺一菅野のエネルギー準位図は「静」なる理論で，スピン転移の駆動力や機構についての「動」なる側面は獲え難い。１９６６年にこの種の錯体が合成されて以来，各種の研究がなされている。生憎（幸なことに？）熱力学的データが皆無であったので，ピンチヒッターを名乗り出て二種の錯体の低温熱容量を測定した。スピン転移には格子系からのエントロピーの寄与が著しく大きいことを見い出し，まずはクリーンヒットと相成った次第。これに気を良くしてゲームに加わろうと考えた。私服を脱いで，ドイツ人が持っていたメスバウァーというユニホームをしばしのあいだ借り，目下，バッターボックスでツーストライクツーボール。四球ではすっきりしない，三振では見苦しい。安打かあわよくばホームランをと緊張の連続。

ところで私，野球に関しては無知もよいところ。ドイツ人はことのほかフットボールが好きな国民で，昨年の世界選手権の時などは，国をあげての狂喜狂乱の沙汰。かってナチス党の狂気を育てた精神的風土を見る思いで，空恐ろしい気さえする。ところで私，フットボールもからきし駄目。少々爺臭いが，仕事の合間に各地のドーム（Dom）やキルヒェ（Kirche）を巡って，もっぱらその芸術（Kunst）を楽しんでいる。福音主義の御大マルチンルターを輩出した国にしては，若者はあまりにも宗教に無関心なのは予想外。諸侯分立を長年続けた国なので，地方色豊かでおもしろい。ローザルクセンブルクもかって党員であったという社会民主党が政権を取っているせいかどうかはしばらく置くとしても，傍目には貧豊の差が殆んど無く，なんとも豊かな国といったところ。

日本出発前にはこう考えた。「第二次大戦で共に戦った国だから，ドイツは好日的で日本を良く識っているだろう」と。ドイツに来て，皆が好日的なのには気を良くしたが，日本については何も知っていない。これは私の認識不足，「第二次大戦で共に負けた同病相あわれむ」の結果かなとも考えた。しかしそうでもないらしい。そう考えるのは，日本人の一方的な感情移入であって，ドイツ人の多くは極東の国日本に同胞意識などは全然持っていない。日本とドイツはあまりにも離れた地球の反対側。好日的なのは，日本人が平均として真直面で勤勉だからということだけ。多くの偉人賢者を輩出したドイツ，倹約家で勤勉なドイツ人，予想に反して陽気でユーモアのあるドイツがすっかり気に入って楽しい毎日ではある。

（以　上）